

イエスのことば 第 56 回

その後、主は別に七十二人を指名して、ご自分が行くつもりすべての町や場所に、先に二人ずつ遣わされた。(ルカ 10 : 1)

さて、七十二人が喜んで帰って来て言った。「主よ。あなたの御名を用いると、悪霊どもでさえ私たちに服従します。」イエスは彼らに言われた。「サタンが稲妻のように天から落ちるのを、わたしは見ました。確かにわたしはあなたがたに、蛇やさそりを踏みつけ、敵のあらゆる力に打ち勝つ権威を授けました。ですから、あなたがたに害を加えるものは何一つありません。**しかし、霊どもがあなたがたに服従することを喜ぶのではなく、あなたがたの名が天に書き記されていることを喜びなさい。**」(ルカ 10 : 17~20)

□文脈の確認

1. イエスの公生涯を起承転結の四部構成に分け、背景を理解しながら、イエスのことばを一つひとつ学んでいる。
2. 転の部、弟子訓練。十字架まで、1 年余。その前半の約 6 か月間において、イエスは、異邦人の地域へ 4 回、旅行した。異邦人地域への 4 回の旅行は、退避(リトリート)と休息の時であったと同時に、弟子たちの訓練を目的とした。
3. リトリートから帰ってきた後、**紀元 29 年秋 10 月の仮庵の祭りから冬 12 月の宮きよめの祭りまで、約 3 か月の間**に起きた出来事(十字架刑は、紀元 30 年の春 4 月)
 - (1) 仮庵の祭りの前(ヨハネ 7 : 2~10、ルカ 9 : 51~56、マタイ 8 : 19~22)
 - (2) 仮庵の祭りにおいて 指導者層との衝突
 - ① 仮庵の祭りでの衝突【全体的な流れ】(ヨハネ 7 : 11~52)
 - ② 仮庵の祭りの期間中の個別的な衝突(ヨハネ 7 : 53~10 : 21)
律法をめぐる、光をめぐる、メシアの神性をめぐる、生まれながらの盲人の癒やしをめぐる、「羊飼い」(メシア預言)をめぐる
 - (3) 仮庵の祭りの後(ルカ 10 : 1~13 : 21)
 - ① 七十人の派遣(10 : 1~24)
 - ② ある律法学者との問答「永遠のいのちを得るためには」(10 : 25~37)
 - ③ マルタとマリアという姉妹の家にて(10 : 38~42)
 - ④ 祈りについての教え(11 : 1~13)
 - ⑤ メシア的奇跡：口をきけなくする悪霊の追い出し(11 : 14~36)
 - ⑥ あるパリサイ人の家にて：手を洗う儀式について(11 : 37~54)
 - ⑦ 弟子たちへの 9 つの教え(12 : 1~13 : 21)
 - (4) 宮きよめの祭りにおいて(ヨハネ 10 : 22~39)

七十人の派遣

□アウトライン

仮庵の祭りの後、イエスは、これからご自分が行くつもり町の町や場所に、あらかじめ 70 人の弟子たちを二人一組で派遣し、滞在場所を準備させた。よって少なくとも 35 ヶ所を準備することが彼らの任務であった。後で登場するマルタとマリアの姉妹の家（ルカ 10：38）も、この「七十人の派遣」によって準備された滞在場所のひとつである。

- A) 七十人の派遣（ルカ 10：1～16）
- B) 七十人の帰還（ルカ 10：17～20）
- C) イエスの祈り（ルカ 10：21～24）

A) 七十人の派遣（ルカ 10：1～16）

1. 派遣される弟子たちの任務（1 節）

1 節 その後、主は別に七十二人を指名して、ご自分が行くつもりすべての町や場所に、先に二人ずつ遣わされた。

- 別に・・・使徒に任命した 12 人の弟子たちとは別に、という意味。
- 七十二人・・・人数は、写本により「七十人」、あるいは「七十二人」とある。新改訳 2017 は「七十二人」の写本による訳。

2. 任務に就く前にする祈り（2 節）

2 節 そして彼らに言われた。「収穫が多いが、働き手が少ない。だから、収穫の主に、ご自分の収穫のために働き手を送ってくださるように祈りなさい。」

- 収穫が多い・・・イスラエルの残れる者（レムナント）、真の信仰者は、民族全体に対する割合としては少数であるが、それでも人数は「多い」。
- 収穫のために・・・収穫のために働くということは、その前に種を蒔くことや収穫の準備をすることも、当然含む。
- 送ってくださるように祈りなさい・・・主の働き人となるときに、必要なステップが 3 つある。第一、イエスが働き人を選ぶ。第二、選ばれた人は神に働き人を送ってくださいと祈る。第三、喜んで、自分自身がその働き人となる。
- 私たちへの適用・・・教会時代の信者である私たちに適用すると、第一、自分に与えられている聖霊の賜物を見出し、それを用いて兄弟姉妹に仕え、皆の益となる。第二、天の父に働き人を送ってくださいと祈る。第三、喜んで、自分自身がその働き人となる。この 3 つのステップによれば、主のために働くというのは、個人プレーでもないし、他人から命じられてすることでもない。

3. 任務に関する指示

3 節 さあ、行きなさい。いいですか。わたしがあなたがたを遣わすのは、狼の中に子羊を送り出すようなものです。

- 派遣先では、きびしい拒否を受けることを覚悟せよ。しかし、決して暴力を返してはならない。

4 節 a 財布も袋も持たず、履き物もはかずに行きなさい。

- 宿泊費や食費、着替えなどの心配はいらない。イエスを支持する人たちの家を見つけて、そこに滞在するのだから、提供されるものを無償で受けよ→7 節

4 節 b 道でだれにもあいさつしてはいけません。

- イエスが旅を開始するのはもうすぐ。短時間のうちに 35 カ所以上の滞在先を確保しなければならない。ぐずぐずしてはいられない。

5~7 節 a どの家に入っても、まず、『この家に平安があるように』と言いなさい。ここに平安の子がいたら、あなたがたの平安は、その人の上にとどまります。いなければ、その平安はあなたがたに返って来ます。その家にとどまり、出される物を食べたり飲んだりしなさい。働く者が報酬を受けるのは当然だからです。

7 節 b 家から家へと渡り歩いてはいけません。

- その町の中にもっといい滞在場所となる家を探すことはするな、という指示。
【弟子たちが行ってその町で最初に受け入れてくれた家を、その町でのイエスの滞在場所とする】というルール。

8 節 どの町に入っても、人々があなたがたを受け入れてくれたら、出された物を食べなさい。

- 出された食べ物についてあれこれ言わずに、食べる。

9 節 そして、その町の病人を癒やし、彼らに『神の国があなたがたの近くに来てい』と言いなさい。

- 滞在先での弟子たちの働きのひとつは、病人の癒やし。
- メシアの王国では、王であるメシアのもとに病人が来るなら即座に癒やされるであろう。今回の派遣で弟子たちが病人を癒やすのは、人々にメシアの王国での恵みを前もって体験させること。神の国が近くに来ていとは、メシアであるイエスがもうすぐこの町に来られるという意味。

10～12 節 しかし、どの町であれ、人々があなたがたを受け入れないなら、大通りに出て言いなさい。『私たちは、足に付いたこの町のちりさえ、おまえたちに払い落としに行く。しかし、神の国が近づいたことは知っておきなさい。』

あなたがたに言います。その日には、ソドムのほうが、その町よりもさばきに耐えやすいのです。

- 弟子たちの任務は、イスラエルの真の信仰者たちを起こすことであるが、それと同時に、そうでない人々に対してさばきを宣言することも。
- ソドム：アブラハムの時代に、「彼らの罪はきわめて重い」（創 18：20）と神から判定され、天から硫黄と火が降ってきて滅ぼされた町（創 19 章）

13～15 節 ああ、コラジン。ああ、ベツサイダ。おまえたちの間で行われた力あるわざが、ツロとシドンで行われていたら、彼らはとうの昔に粗布をまとい、灰をかぶって座り、悔い改めていたことだろう。しかし、さばきのときには、ツロとシドンのほうが、おまえたちよりもさばきに耐えやすいのだ。カペナウム、おまえが天に上げられることがあるだろうか。よみにまで落とされるのだ。

- コラジン、ベツサイダ、カペナウムは、ガリラヤ地方の町々。イエスの宣教活動の拠点地域であり、イエスによる数々の奇跡を間近に見てきたにもかかわらず、多くの人々はイエスを受け入れなかった。
- 今回、弟子たちが派遣される町々は、ユダヤ地方とその周辺であったと推定される。もし弟子たちを受け入れなければ、それらの町々もコラジン、ベツサイダ、カペナウムと同じさばきを受けることになる。
- ツロとシドン・・・異邦人の町々。異邦人よりも、イスラエル人のほうがきびしいさばきを受けるとは当時の常識を覆すことば。さばきとは、不信者の最終的行先である「火の池」のさばきを指す。その罰の重さには、軽重がある。

16 節 あなたがたに耳を傾ける者は、わたしに耳を傾け、あなたがたを拒む者は、わたしを拒むのです。わたしを拒む者は、わたしを遣わされた方を拒むのです。」

- わたしを遣わされた方＝父なる神。イエスを拒むのは、父なる神を拒むことである。イエス以外に、私たちが神との和解に導けるお方は、いない。

B) 七十人の帰還 (ルカ 10 : 17~20)

17~20 節 さて、七十二人が喜んで帰って来て言った。「主よ。あなたの御名を用いると、悪霊どもでさえ私たちに服従します。」

- 弟子たちが帰って来た。彼らは悪霊が自分たちに服従したと喜んでいて、喜んで帰って来たので、35 カ所以上の滞在場所は準備できたのであろう。

18~19 節 イエスは彼らに言われた。「サタンが稲妻のように天から落ちるのを、わたしは見ました。確かにわたしはあなたがたに、蛇やさそりを踏みつけ、敵のあらゆる力に打ち勝つ権威を授けました。ですから、あなたがたに害を加えるものは何一つありません。」

- サタンが天から地上に落とされるのは、7 年間の大患難期の中間時点、すなわち後半期 3 年半に入ろうとする時点においてである (黙 12 : 7~12)。イエスは、このことを預言した。預言者は、将来ある出来事が起きる幻を見せられて、それについての預言をすることが多い。
- イエスは七十人を派遣する際に、彼らに悪霊に対抗する権威を与えていた。それは前には十二使徒たちに与えられていたが、七十人の派遣にあたっては彼らにまで権威の付与が拡大されていたのである。

20 節 しかし、霊どもがあなたがたに服従することを喜ぶのではなく、**あなたがたの名が天に書き記されていることを喜びなさい。**

- しかし、悪霊が自分に服従することを喜ぶよりも、自分が救われて神の子とされたことを何よりも喜ぶべきである。信じて救われたということが、どれほど素晴らしいことか、それを思ってイエスは、次に喜びにあふれて感謝の祈りをささげる。

C) イエスの祈り (ルカ 10 : 21~24)

1. イエスは祈りはじめた (21 節 a)

21 節 a ちょうどそのとき、イエスは聖霊によって喜びにあふれて言われた。

2. 祈りの中で、なぜある者は信じ、ある者は信じないのか、を明らかにする (21 節 b)

21 節 b 「天地の主であられる父よ、あなたをほめたたえます。あなたはこれらのことを、知恵ある者や賢い者には**隠して**、幼子たちに**現してくださいました**。そうです、

父よ、これはみこころにかなったことでした。

- 信じない者にはこれらのことが隠されている。どんなに知恵があり、賢いとしても、わからない。人の知恵や賢さで理解できるものではない。
- 信じる者には、神がこれらのことをわかるようにしてくださったのである。幼子とは、霊的な赤ちゃんである。信者は、だれしも信じたときは幼子であり、信仰生活の中で霊的に成長していく。

3. イエスは、信者が父なる神について知るべきことをすべて、信者がわかるようにしてくださる (22 節)

22 節 すべてのことが、わたしの父からわたしに渡されています。子がだれであるかは、父のほかはだれも知りません。また父がだれであるかは、子と、子が父を現わそうと心に定めた者のほかは、だれも知りません。」

- 父がだれであるか：父なる神について知るべきこと
- 子が父を現わそうと心に定めた者：「子」とはイエス、「父」とは父なる神。御子イエスが父なる神について教えようと「心に定めた者」とは、私たち信者である。

4. 祈りを終えるにあたり、イエスは天に向って祈っていた姿勢から、七十人の弟子たちへ向き直り、彼らがどれほど素晴らしい特別な時を過ごしているかを語った。旧約聖書の中で、多くの王たちや預言者たちがその日を見たいと願ったメシアの登場を、彼らはその目で見ているからである (23～24 節)

23～24 節 それからイエスは、弟子たちの方を振り向いて、彼らだけに言われた。「あなたがたに言います。多くの預言者や王たちは、あなたがたが見ているものを見たいと願ったのに、見られず、あなたがたが聞いていることを聞きたいと願ったのに、聞けませんでした。」

- 彼らだけに言われた・・・他の人のいる所ではなく、七十人の弟子たちだけに言われた。メシア拒否以降、イエスはご自身をメシアであるとは公言しない。
- あなたがたが見ているもの、聞いていること・・・メシア、メシアのことば

□まとめ：「あなたがたの名が天に書き記されていることを喜びなさい」、このことばは今の私たちにもそのまま、あてはまる。2 千年前にメシアが現れ、私たちを救い、私たちの名が天に記されているとは、どれほどの恵みであろうか。私たちの名が天に記されているから、「私たちの国籍は天にある」(ピリピ 3:20)。そして、復活の体をいただき、再びこの地上に、愛する人々とともに立つ日が来る。4 月イースター礼拝のテーマは、「復活の体」。